

現代中国税制の基本的特徴と徴税制度改革，国際課税問題 ～中国税制の歴史的背景と金税工程問題を中心に～

宇都宮 浩一

本研究は，近年急速な経済成長を遂げ，国際社会に大きな影響を及ぼすようになった中国について，経済発展を支える税制を分析するものである。

中国税制の研究成果のうち，南部稔教授の研究成果は，社会主義計画経済体制下の中国税制における基本的特徴の析出を企図したものであった。しかし，他の先行研究を検証すると，1978年および1994年の改革によって税制が一度断絶し，その後近代制度へと再編がなされたとする論調が多いことに気づいた。中国税制の研究を行う上で，前段階やそれ以前の税制との関連性についての視点を欠いては，変化の根底にある事象を読み取ることはできないし，資本主義国で用いられている分析ツールをそのまま中国税制に適用しても，包括的に説明することはできない。社会現象やその変化には，連綿と続く歴史の中で蓄積された様々な無形資産が内在しており，これを抱えつつ新たな状況を取り入れていくものであると考える。

本研究は，このような問題意識の下，中国税制の制度を中心に分析し，財源確保優先，流通税制偏重という基本的特徴を析出した。また，中国税制の歴史と統計をもとに，宋代から存在する流通税制が税制の中心的役割を担い続けているが，約20年前に導入された所得税制が浸透するにはなお時間を要することを指摘した。さらに，所得税制は経済変動の影響を受けやすく，高成長が続く中国においては増やすためには魅力的な税制ではあるが，天安門事件やアジア通貨危機などの影響を容易に受けて増収が乱高下する一方，流通増収はこの間堅調に増加していた点を指摘した。財源確保を優先する中国税制の基本的特徴から判断すれば，今後も流通税制の主導的地位は変化しないと考える。

これを確認するために，移転価格や電子商取引など現代税制の課題への対応について，徴税活動の情報化を中心に分析した。とくに金税工程には，財源確保優先と流通税制偏重という特徴が如実に現れており，既に一部の納税者は税務局及び支払口座とオンラインで結び付けられ，納税が自動化されている。このように，取り漏れがなく，瞬時に増収が確定するシステムは，今後の中国税制の進むべき方向性を端的に示しており，流通税制が中心的役割を担い続けることの証左となっていることを指摘した。